

第 20 回 埼玉交流会の成功に向けて

交流会実行委員長 遠藤

原発事故による死者は一人もいない、という 2013 年 6 月 20 日の政治家の発言を聞いて驚いた。直ちに思い浮かべたのが、ある酪農家の自殺であった。

事故直後、放射能汚染された原乳を捨てている映像は今も鮮明に浮かぶ。牛数十頭を飼い酪農を営んでいた日々があつという間に崩れ、さぞかし悔しかったことであろう。原乳は出荷できない、乳牛も放射能汚染されてもはや飼えない。生きるすべのなくなったこの酪農家をだれが非難できるのか。

この妻が東電に賠償を要求して提訴したところ、東電側は「事故と自殺との因果関係は認められない」と主張し、請求棄却を求めたという。東電の主張と政治家の発言は通ずる。

この妻はフィリピンから嫁ぎ、酪農家との間に子どもがいるという。この妻子、特に子どもはその後どうなったかと頭がめぐる。日本のどこかの学校で学んでいるのだろうか。フィリピンに帰ったのだろうか。

酪農家の家族をはじめ、原発事故では多くのものを失った。多くのものが犠牲になった。

福島のゴルフ場には、一時期、韓国から多くの客が来ていた。その客も来なくなったことで関連の人々の暮らしはどうなったか。ゴルフ場開発が環境に及ぼす問題を無視するつもりはないが、ゴルフが取り持っていた韓国と福島の縁が最低限両国の人々に悪い感情を及ぼさなかったということは言えるだろう。

昨年の陝川（ハプチョン）交流会では国家によりおしつぶされ犠牲になりながらも懸命に生き、闘い、真実を発掘し、明らかにしようというとしている人々やその現場の一端に触れた。

埼玉交流会では、陝川交流会の成果をふまえ、福島の子どものことを日韓でさらに考え、深めていくことになる。福島の子どもたちは遠くにて知らない存在ではない。3 年経っても

目次

第 20 回交流会の成功に向けて	1
第 20 回交流会フィールドワークの紹介	2
第 20 回交流会案内	4
韓国人との心の和解はどうすれば可能か —徐錫華口述記録を読んで	5
大森報告「戦後日本の教育政策の検証」を聞き、我が体験を振り返る	9
短信	16

事故の収束がなされていない今、私たちの前にはあまりにも大きな壁、難題が立ちふさがっているように見える。いや、前ではなく、私たちの中にこそ大きな壁、難題が立ちふさがっている。少しずつでも穿つ作業をしていかなければならない。

フィリピンの子どもの関連で、目の前のフィリピンルーツの生徒のことも頭の中で去来する。Aは最近学校へ来ていないけれど何をしているだろうか。アルバイトがみつからないと言っていたけれど、その後みつかったのだろうか。家には家族とともにいられるのか。Bは以前スナックで働いている母が酒臭くていやだと言っていたが、最近チェーンの牛丼屋でがんばっているらしい。それは良いが学校に足があまり向かない。この先どうなるのか。

AもBもそして教員の私も 3. 11、「福島」の直後の4月から他のメンバーとともに同学年出発した。「そんなの関係ねえ」、「知らねえ」、「どうでもいい」等と生徒たちはふだん言うが、こと3. 11、「福島」についてそんなことは言わない。まして「死者はいない」とは言わないだろう。

ソチオリンピックの金メダル、銀メダルは華やかだ。しかし、この間の大雪被害報道はなぜか二の次になっている。「福島」はもう忘れたのか。そんなことはない。あつてはならない。一人一人のことからみんなのことを考え、みんなのことを考えながら一人一人のことを考えたい。

さて、昨年暮れ、官房長官は安重根を「犯罪者」と呼んだ。これまた驚愕させられた。安重根を「犯罪者」とするならば、安重根を讃える韓国や北朝鮮は「犯罪者国家」、韓国人、朝鮮人は「犯罪者の仲間」となってしまうのではないか。私の知る韓国人も在日コリアンも皆そうになってしまうのではないか。一方、伊藤博文は「犯罪者」に殺された「偉人」だったのか。

その安重根については、遺骨すら残されていない。安重根の彼方にいる一人一人、伊藤博文の此方にいる一人一人が、歴史を、真実を直視し、未来を開いていかなければならない。

「一人の子どもも切りすてない教育…福島の子どもの実態からみえるもの」をテーマにかかげた埼玉交流会は新たな出発点になる。そう信じたい。フィールドワークで訪ねる高麗神社、丸木美術館、吉見の百穴等は単なる遺跡、文化財ではない。それらに込められた意味を私たちがつかみ直し、未来に向けた礎としたい。



第20回 交流会フィールドワークの紹介 ～

安藤

第20回交流会でのフィールドワークについて、簡単にご紹介いたします。

① 高麗神社（こまじんじゃ）（埼玉県日高市）

古代の関東地方には、朝鮮半島から多くの渡来人があったことが、様々な史料から考えることができます。そしてこの高麗神社は、1300年の時空をこえて、この事実を明快に私たちに伝えてくれます。この神社の祭神は高麗王若光（こまのこきしじゃっこう）といい、続日本紀によれば、西暦716年に現在の関東各地に点在した高句麗渡来人1799人をこの地域に移住させ、「高麗郡」を置いたとあり、若光はその首長となったとあります。当時の人口から考えれば、すでに多くの

渡来人が日本列島に定着していたことがわかります。そしてこの神社は、本当は高（句）麗の神社で、神社の扁額にも書かれています。

高麗神社は創建以降長い年月が経ちましたが、現在の宮司が高麗（こま）さんと、若光直系のご子孫であります。また神社の入り口や周辺の駅前にはジャンスンが設置され、高麗神社や周辺の高麗郷は現在でも、古代の朝鮮半島との繋がりを強く意識させる場所なのです。

神道と渡来人というと、全く別の存在のように思われるかもしれませんが、（近代においては、朝鮮半島で神社崇拝が強制され、負の歴史の象徴のようにさえ思われてしまいがちですが。）白髭神社や妙見信仰など、朝鮮半島やアジア大陸由来の信仰が多く残っていることだけを考えてみても、日本列島の古代は東アジアの古代と深くつながり、渡来の信仰・文化は日本の中に、まるでじっくりと熟成されたように息づいていることを考えさせられる。その多くはあまりに日本化されてしまって痕跡を探すのが容易ではないが、高麗神社は日本の古代における多文化受容を、今に伝える大切な場所のように思えます。



ジャンスン

② 吉見百穴（よしみひやくあな・よしみひゃっけつ）（埼玉県比企郡吉見町）

吉見百穴は、まるで巨大な蜂の巣のように、台地の南西側崖に作られた横穴の遺構です。

横穴自体は、古墳時代以前の墓ということで、やはり1500年ほど前のものと考えられています。関東地方には、この周辺以外にも生活の場所として、あるいは墓地としてほられたと考えられる横穴群が各所に見られます。

そしてその岩山に目を付けたのが、第2次世界大戦中の軍隊で、軍需工場建設のために大きなトンネル（直径3メートルほど）が3本掘られました。このトンネルの一部は現在も入ることができますが、あらためて戦時中の突貫工事ぶりや、動員された人々の過酷な運命を考えずにはいられない構造物であります。同じ場所で、古代と現代の2つの歴史遺産がある場所なのです。ここではこの場所の由来に詳しい方にお話をさせていただきながら見学したいと思います。



③ 嵐山溪谷（らんざんけいこく）（埼玉県比企郡嵐山町）

交流会会場の女性教育会館近くを流れる都幾川（ときがわ）沿いが、京都の嵐山に似ているとされることから名づけられたのが、この嵐山溪谷です。夏は溪谷でバーベキューをしたり、川遊びをしたりする人が訪れ、秋には紅葉でまた、来訪者があるという、埼玉県でも有数の名勝地になっています。

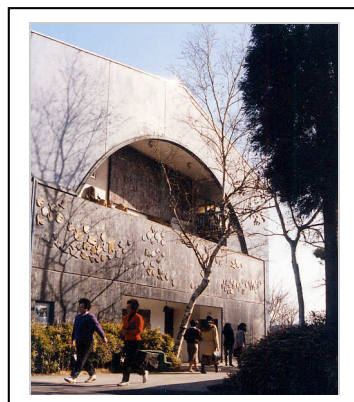
夏の暑い埼玉北西部でフィールドワークしながら時間が許せば、ぜひこの溪谷で涼をとって一

息いれたいものです。

④ 丸木美術館（まるきびじゅつかん）（埼玉県東松山市）

私たちは5年前の沖縄交流会（早いものです）で佐喜眞美術館を訪問し、丸木位里・俊の「沖縄戦の図」（1984年完成）に直面しました。丸木位里さんの水墨画、俊さんの油彩画によるスケールの大きさに圧倒されてしまいました。そして今年は東松山の丸木美術館で「原爆の図」に出会うことになります。

原爆の図は1950年に第1部「幽霊」が発表されてから1982年の第15部「長崎」までの長大な作品です。現在第15部が長崎原爆資料館に所蔵されているほかは、この美術館で作品を鑑賞することができます。すでに故人になられたお二人の人生をかけた絵を見ると、あらためて戦争の悲惨さを感じるだけでなく、原爆、水爆被害だけでなく、現在原発事故でゆれる、この国の有様について考えざるを得ません。私たちがすすむべき方向はどこなのか、心に深く問いかけながら訪れたいものです。



以上はなはだ簡単ですが、第20回交流会のフィールドワークについてご紹介させていただきました。日本と韓国の多くの人々が、得るべきもの多くなればよいと願っています。多くのご参加をお待ちいたします。

日韓合同授業研究会第20回交流会埼玉大会

「一人の子どもも切り捨てない教育

～フクシマの子どもたちから見えてくるもの」

日時：8月1日（金）～4日（月）

場所：国立女性教育会館（埼玉県嵐山）

8月1日（金）開会式

2日（土）全体会 授業報告と討議

3日（日）フィールドワーク

4日（月）全体会 まとめの話し合い

どなたでも参加できます。

部分参加も可

参加費未定（26000円前後の予定、学生割引あり）

次号ウリに申込書を同封します。

韓国・朝鮮人との心の和解はどうすれば可能か

—徐錫華口述記録を讀んで—

波多野

沖縄戦で犠牲になった韓国・朝鮮人の実態を知ろうという Y さんの呼びかけにしたがって、ここ数年、韓国から沖縄に強制連行あるいは徴兵された方やそのご遺族にインタビューする作業に参加している。何分、あまりにも時間が経ってしまって生存者は少なくなり、遺族も高齢化し、あるいは日本人には会いたくない、韓国政府から補償金をもらったからもう関わりたくない、また当時強制連行されたのは比較的貧しい人が多かったことからそのことを他人に知られたくない、などさまざまな理由でお会いできる人数は限られていて、これまでに会えたのは、生存者ひとり、遺族 8 人に過ぎない。会ってくださる方は、日本政府の対応にはもちろん不満や恨みを述べられるが、わたしたちに対しては、みなさん穏やかで丁寧であることに驚かされてきた。どなたも怒りをあらわにされることはなく、聞き手のわたしたちはその気遣いに恐縮するばかりだった。

しかし、昨冬訪ねた慶山（キョンサン）の L さんの夫、徐錫華さんの本音は違っていた。幸い沖縄から生還されたのだが、生前、同僚たちが地雷を踏んで亡くなったときのことが思い出されて涙を流し、「自分が生きていく意味があるのだとしたら、この感情を日本人がわかるようにしたい」と語っていたという。（「ウリ 90 号」参照）2009 年、88 歳で亡くなる前年に口述された記録には、沖縄での状況やその後の徐錫華さんの心情が赤裸々に残されていた。

1944 年 7 月、慶尚北道（キョンサンブット）の青年 2,500 名が徴用されて特設水上勤務隊に組織された。軍属、当時の呼び名では軍夫である。米軍との対決に備えて急がれた沖縄の要塞構築や荷役などの労働力に当てるためだった。24 歳の徐錫華は「球 8886 特設水上勤務第 103 中隊」に配属され、大邱（テグ）の師範学校で 20 日間訓練を受けたのち、行き先も知らされないまま釜山（プサン）で船に乗り、8 月 10 日、沖縄本島に上陸した。最初は港での荷揚げや食料管理に従事した。

かれがいつ座間味島に移動したかは定かではない。戦史（『戦史叢書・沖縄方面陸軍作戦』防衛庁 インターネット孫引き）によると 1944 年 2 月 12 日、「海上挺進基地第一大隊の改編」さらに日時はなく「特設水上勤務中隊の一小隊が沖縄本島から派遣されて海上挺身第一戦隊・戦隊長の指揮下に入った」とある。わたしが 2010 年に座間味島を訪れて M さんから聞いた話では、9 月に日本軍が来た、軍人は民宿し朝鮮人軍夫たちは国民学校校舎に泊まっていたということだった。しかし徐錫華は 10 月 10 日の那覇大空襲を経験したと述べているから座間味島に来たのはそれ以降だろう。かれが所属していた特設水上勤務第 103 中隊は、市川武雄中隊長以下将校、下士官、兵合計 40 名、朝鮮人軍夫約 300 名だった。なお当時、座間味島に派遣された兵力はすべてで 440 名あまり（軍夫を除く）で、ほかに現地徴集の防衛隊員がいた。ちなみに持っていた武器は、特攻艇 100 隻と爆雷 210 個のほかは、機関銃 18、小銃 290、拳銃、軍刀、手榴弾ぐらいだった。座間味島は特攻艇の基地だった。（*特攻艇とは、ベニヤ板製モーターボートに炸薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦し、上陸する米軍の船団に体当たり攻撃するもの。）徐錫華らは物資運搬のほか、特攻艇や日本兵のための壕を掘ったのだろう。壕はカギ型に幾重にも曲がり食料や

Pa

武器などあらゆる物資が保管されていた。

1945年3月23日、米軍は座間味島を空襲し艦砲射撃をくわえた上、25日に上陸し始めた。その日座間味の住民177名は壕内で凄絶な「集団自決」をした。死に遅れた人びとのうち358名が空襲や艦砲射撃で死に、残りの150～250名はのちに米軍に収容される。日本軍は水際での迎撃をあきらめ特攻艇を破壊して各部隊に番所山への集結を命じる。(結局座間味の特攻艇は出撃の機会を得られず、多くの特攻隊員が自決した。)26日、米軍は座間味島の高地を占領する。このとき、海岸集落にいた約300人の朝鮮人軍夫も山中に逃れたと言う。その後日本軍は何度か「夜襲」「斬り込み」を試みたが、上記のような武器しか持たない日本軍は物量を誇る米軍に立ち向かえるはずもなく戦死者や自決者が続出した。その後しばらく攻撃を中止していた米軍は4月10日、第二次攻撃を開始。11日、梅澤裕戦隊長は、戦闘継続は不可能と判断、各隊に独自の行動を取るよう命じた。事実上の戦闘停止である。(梅澤戦隊長は5月、米軍の捕虜となる。)上記戦史には座間味島における軍人の戦死者約216名、うち103中隊では15名、軍夫不詳とある。防衛隊員や民間人の死者は記録されていない。

3月26日以降、激しい戦闘と追い詰められた状況の中で、朝鮮人軍夫たちは使い道がなくなり、食料の供給をほとんど絶たれた。徐錫華の話にも本部に米をもらいに行ったが風呂敷にたったふた包みしかもらえず、それを80人で分けて生米のままかじった、空腹に耐えかねて暗い中で何か、人の肉かもしれないものを拾って焼いて食べたことが出てくる。また別の証言によれば、米軍に投降しようとする朝鮮人は、日本軍の居場所を告げる可能性があるのでスパイとみなされて、見つければ射殺された。激しく続く艦砲射撃の中で壕に入ろうとすると追い出された。食料を盗めば射殺された。(『第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団報告』1972)一方、徐錫華は朝鮮人たちも壕に逃れたが、そこではかつて朝鮮人を虐待した覚えのあるものは、復讐を恐れて同じ壕には居られなかったとも述べている。日本軍兵士と朝鮮人軍夫との敵対関係はここであからさまになった。米軍の攻撃を受けながら、日本兵と朝鮮人軍夫との間でも、殺すか殺されるかの戦いが繰り返されていたのだ。

その間、徐錫華はどこにいたか。娘さんは父から聞いた話として「阿嘉島にいたとき、、夢に父親が出てきて導かれて山を下りて助かった」と言っている。口述記録の中には「無人島に行こう」と相談した話が出てくるが、阿嘉島は無人島ではなく座間味島同様特攻艇の基地であり、同じ時期に米軍の攻撃を受けている。当時の阿嘉島の地図に「アラン峠」があるからには朝鮮人軍夫も確かに居たはずである。103中隊が阿嘉島に移ったという記録は見つからないが、何かの理由で徐錫華は阿嘉島に渡ったのかもしれない。同様に日付はわからないが、かれは米軍の呼びかけに応じて投降し、捕虜収容所で暮らした後(収容所内では、朝鮮人たちが日本軍兵士を殴るなど、絶えず復讐の機会を狙っていたので、米軍は両者を隔離しなければならなかった)、1946年2月に帰国した。のちに仲間たちと太平洋同志会を結成し、慰霊碑を建てる活動などに参加した。

徐錫華の口述を読んですぐ気づくのは、「戦争になったら憲兵を殺さなくちゃ、復讐しなくちゃと思った」「日本に行ってあいつらの孫たちにあの時代にどんなだったか言いたい、日本の奴らに会うのが嫌だから行かない」「いま日本と戦争するというなら、わたしは銃を取って先に立つよ」という怒りの噴出とかれが日本人について語るとき、ほとんどの場合「ウェノム(倭奴)」という蔑称を使うことだ。何がそうさせたのだろうか。

徐錫華は1920年、慶尚北道慶山郡で生まれた。父は農業のかたわら東学系の普天教の布教使をしていたと言うから、貧農ではなかっただろう。しかしかれが普通学校(*小学校)4年生の

とき、父は布教中の事故がもとで亡くなったので、母と姉、弟、妹の暮らしがその肩にかかった。授業料が必要だった学校には行けなくなり書堂（*寺子屋）に通ったが、働かなくてはならないのでそれも数年で止めた。普天教徒の人びとは集会にかれを呼んで父の後を継げと迫ったが、「父はこの教えのために死んだのであり、息子の自分がどうしてこの教えを信じられるか」と突っぱねて家にあった本なども燃やしたという。幼いながらきっぱりとしていた。

1939年、食料の供出が始まった。（*法律上は、1940年に米穀管理規則が作られ、種子と自家消費以外以外の米を朝鮮総督府に一定価格で納めさせることとした。後には供出量をあらかじめ定めて部落単位で責任を負わせたり、米以外の雑穀まで対象とした。全生産量の40～60パーセントが強制的に供出させられたと言う。）小作料を払ったあと供出すると手元に残る米は1、2か月分しかなく、足りない分を補うために野草や干菜を入れて粥にして食べた。そのわずかな米も地面に甕を埋めて隠しておかなくてはならない。いったん供出しても、まだあるだろうと厳しく督促され、大人たちが地面にひざまずかされて殴られる。見ている家族は涙、涙だった。「わが国を属国にして、韓国の国民を奴隷にして苦勞させる」と思っていた、若い徐錫華は怒りを抑えきれず、役人の自転車3台を棒で叩き壊した。報復を恐れて1週間逃げ回った後、鶏を1羽潰して警察に持って行き、ことなきを得たが、もうここでは暮らせないと思って日本に働きに行く。

熊本のセメント瓦工場に就職したかれが驚いたのは、朝鮮で日本人が朝鮮人に対して取る態度と、日本人同士の平等な態度との「天と地ほど」の違いだった。「よその土地に来たのだからそこに合わせなくちゃ」と思ったかれは、神社に多額の寄付をして「朝鮮人」という蔑称ではなく「朝鮮半島から来た青年」と呼ばれて丁重に扱われたし、工場で責任者にもなり、日本人の友人もでき、背広を着て中折れ帽をかぶった写真が写真館のウインドウに飾られて人気になるなど、穏やかな日々を過ごせたようである。3年後、家に帰り結婚もし、農業のかたわら商売をしていた。

「徴発命令」が来たとき、(*かれは「徴用」ではなく、牛などを強制的に取り上げるような「徴発」だったと言う。) 徐錫華は自分が行けば家族が飢え死にすると訴えたが、聞き入れられなかった。自転車を壊したせいで目をつけられ、選ばれたのだろうとかれは思った。

大邱での訓練中、食事の分配が不公平なことをめぐって集団で班長を殴った。日本の兵隊が「誰がやったか？」と聞くのに、ひとりだけ手を上げて名乗り出て理由を説明し、「おまえが班長を選べ」と選び直しを任された。曲がったことは我慢できず、また責任逃れもしたくない強い正義感の持ち主だった。

沖縄本島では食料を荷揚げして管理する仕事の責任者になった。あるとき、盗みに入った日本兵を捕らえると、相手は銃を構えて「おまえなんかここで殺してもいいんだ」と言う。ここまで連れてこられたことも腹が立つ上に、自分は日本人でおまえは朝鮮人だと馬鹿にするのに腹が立って、熊本で覚えた柔道の技で投げ飛ばして押さえ込んだ。軍属が軍人を殴った一大事。憲兵に引き渡されて背中が千切れそうになるほど棒で殴られた。そこに知らせを受けた中隊長がやってきて「食料の管理をこいつに任せているんだ、なぜうちの人間に手を出すのか」と一喝して助けてくれた。この中隊長はのちに徐錫華に「死ぬも生きるも一緒だ」と言ったそうだから、二人の間には固い信頼関係が結ばれていたのだろう。徐錫華も中隊長が戦死したときには、家族を探してその最後の様子を伝えたいと思ったと言う。また、娘さんの話では、島で水も食料もなく仲間が死んでいくときに施しをしてくれた民家の人に会いたいとも言っていたそうだから、情には情で応える人であり、日本人すべてを憎んだのではなかった。

かれは多くの場合、自分よりも仲間が受けた仕打ちを言う。食料の荷揚げをしていたとき、いつも空腹だからだれもが当然米を盗んで食べる。そしてほかの仲間にも持って行ってやりたくてポケットに隠す。検査に引っかかり見つかったときの殴られようは「犬よりも」ひどく、ああ、

ああと言っていたが最後には声も出ずにぐったりしてしまう。それを見て泣かない者はいなかった。島で戦争になってから、日本兵たちは朝鮮人は邪魔になるから殺そうとした。殺されまいと逃げ回り、米軍の艦砲射撃や空襲の中で食べ物も水もなく死んでいった仲間を語るとき、徐錫華の怒りは燃え上がる。

日本が戦争をするための人手が足りないからと、勝手に命令を下して「徴発」し、行く先も言わずに沖縄に連れて行って労役に従事させるだけでも不当なことなのに、そこでの待遇は食べ物も乏しい上に、「犬や豚のような扱い」だった。役に立たなくなれば食料も与えずに捨て、死んでも記録には「軍夫不詳」と名前はおろか、人数さえ把握されていない。徐錫華が怒るのは当然だ。問題は、日本人たちがどこまでこの事実を知っているかだ。

これまでわたしたち（あるいはわたし）は沖縄戦を思うとき、最初は「鉄の暴風」にさらされ、摩文仁の崖に追い詰められて死んでいったたくさんの兵士や看護婦として動員された女学生たちのことを思った。つぎにしだいに明るみに出た住民の死者、とくに「集団自決」の悲劇に心を打たれて反戦の思いを強め、この戦争を通じて明かされた国家と国民の関係や、日本本土を守るための捨て石とされた沖縄について考えることになった。しかし、朝鮮人軍夫や朝鮮人従軍慰安婦がいたことはうすうす知りながら、深く思いをいたすことはなかったのではないだろうか？摩文仁平和公園の平和の礎に刻まれた死者のうち、朝鮮・韓国出身者が 447 名に過ぎないこと、多くの朝鮮人軍夫が死んでも名前さえ記録されなかったことが、わたしたちの無関心さを物語っている。遺族にとってはどうも耐えがたく許しがたいことだろう。かれらの名前・人数・置かれた状況を知ることはわたしたちの義務である。

先日、たまたま手にした『進駐軍が写したフクオカ戦後写真集』（西図協出版 1983）に「帰国を喜ぶ少女たち」と題した写真があり、オカッパ頭の少女たちが 160 名以上も写っていた。九州の工場に動員された「全羅北道女子勤労挺身隊」の少女たちで 8 歳から 14 歳とあるのにことばを失った。こんなこともあったのか。韓国についてだけでもまだまだ知らないことがある。

2003 年のイラク戦争のとき、戦死したアメリカ人兵士の母親が反戦を訴えて話題になった。そのとき、わたしは「息子が米軍に殺されたイラク人の母親の悲しみと戦死した息子を持つアメリカ人の母親の悲しみ」について考えたことがあった。イラク人の母親が悲しむのは当然、しかしアメリカ人の母親には悲しむ権利はないのだろうか？いや、アメリカ人の母親も息子を失って悲しむのは当然のことだ。悲しみに軽重はない。しかし、イラク人の母親にとって、アメリカ人の母親の悲しみは自業自得と映るかも知れない。そのアメリカ人の母親が、息子を殺した戦争の意味を問い反戦の声を上げるとき、そしてイラク人の母親の悲しみに思いを馳せるとき、彼女の悲しみはイラク人の母親の心にも届くのではないか？二人の母親は手を取り合って泣くことができるのではないかと考えた。

日本人が広島・長崎の原爆被害や東京大空襲の被害を語り、沖縄戦を悲しみ、あるいは若くして死んでいった兵士たちを悼むことはもちろん当然だ。（天皇のために戦って死んだ人を神と崇める靖国神社を肯定しているのではない。）しかし、自分たちの悲しみだけに埋没して、日本の行為によって苦しみ、あるいは死んでいった他国の人びとの怒りや悲しみに気づかないなら、わたしたちの悲しみは他国の人には受け入れてもらえないはずがない。



安倍首相は、1991年に従軍慰安婦に関する日本軍の関与を認めて謝罪した河野談話、また1995年に植民地支配と侵略によってアジア諸国に多大の損害と苦痛をあたえたことを認めて反省しお詫びするとした村山談話を否定し（現時点ではいったんそれを引っ込めたが）、これまでの歴史教科書を「自虐史観」に基づくものだと規定して、自分の世界観に合う教科書を作らせて子どもたちを教育しようとしている。かれはいったいどんな歴史教育を受けて来たのか？政府がこのような姿勢である限り、韓国の人びととの和解は望むべくもない。わたしたちができる和解への努力は、一人でも二人でも多くの人に、植民地支配の実態を知らせることから始まるだろう。

しかし、最近、若い人たちのあいだで韓国や中国の「反日的傾向」に反発して、自分が見たくないものは見ようとせず、何が何でも日本が正しい、美しいと思いたがる傾向が強まっているのが気がかりだ。30年以上前、生徒から「先生、日本のことを悪く言わないでください。日本が大好きなわたしは悲しくなります。」と言われたことがあった。当時も今もわたしの答えは同じだ。「あなたは日本のどこが好きですか？風景、食べ物、芸術、音楽、、、日本にはいいところもたくさんあります。でも、美しくなかった、他国の人びとに苦しみをあてた行動がたくさんあった。あったことをなかつたかのようにごまかすことなく、その歴史を認識して日本を変えていこうとすることなしには日本は美しくなれない。」けれども、若い人たちの中には現実の中で挫折して閉塞感を味わい、広い視野を持ってないまま、鬱憤晴らしのように「強く正しい日本」に憧れる傾向があるようだ。植民地支配のあれこれを羅列して教えこんでもうんざりしてしまうかれらの心に響く歴史教育の方法論を、真剣に模索しなければならない。

また、1931年の満州事変、32年の上海事変が起こった背景とそれが本格的な中国侵略と太平洋戦争につながったことを知ること、世界恐慌による不景気からの脱出口とばかりに戦争を歓迎した世論の動きがどんな恐ろしい結果を国内外にもたらしたかを考え、同じ過ちを繰り返さないように、いま冷静に賢く対処しなければならない。

大森報告「戦後日本の教育政策の検証」を聞き、 我が体験を振り返る

川辺

はじめに

1月22日、立教大学・石坂教室でシンポジウム「日本・韓国の教育の現状と課題」が開かれた。韓国側からは、「韓国の教育改革の現状と革新学校—教育実践を中心として」の報告があり、その前に、日本側からは「日本の戦後教育と授業づくり」というテーマで大森さんより報告があった。韓国側報告は、受け取る側の私の理解不十分であり、言及することができない。大森さんの報告は日本語レジメ「戦後日本の教育政策の検証—『一人の人間もきりすてない学校』の視点から」の用意もあり、実感をもって耳を傾けた。

自民党、民主党、維新の会の教育政策の特質が、教育現場の風景をどう変えてきたか、戦後教育の原点をふまえ、前進と圧迫の両側面から歴史的事実を評価して「一人の人間もきりすてない学校」の条件とは何かをはっきりさせたい、とするものであった。

Pa

報告は、私が子どもとして教育を受け、教員として現場にいた時間である。具体的な政策や学校現場の変化を「なるほど、そうだったな」と思って聞いた。私は、戦前の軍国主義、統制的、男女差別教育からは解放され、戦後らしい時代の体験者のように思える。今や、戦後教育の土台となった憲法の空洞化がめざされ、教育基本法は改正され、戦前の教育に戻ることが、日本人の誇りを取り戻すことだと、安倍政権は言い、着々と実行にかかっている。アジア各地を支配し、内外に多くの死傷者を出した戦争体験を語り伝えていくとともに、戦後の体験も大きな枠組みを明らかにしつつ、語り伝えていくことも欠かせないと思うようになった。ただ、私の教員体験は、都立高校40年である。義務教育の小中学校や私立学校とは自ずから異なっている。2001年3月に退職、その後4年間嘱託として勤めたが、21世紀になってからの体験は、外側からの感想となる。小さな個人の体験であるが4つの時期に分け、大森報告を参照しながら、記してみる。

大森報告の目次

- 一、「一人の人間もきりすてない学校」づくりが始まったのは一九五一年だった。
- 二、自民党の教育政策 一九五五～八四年
 - 第一の柱 「政府による制度再編と内容統制」
 - 一九六一年 全国一斉学力テスト 高度成長のための能力主義の政策開始
 - 一九六六年 中教審答申「後期中等教育の拡充整備について」 高校の多様化
 - 一九六八年 小学校学習指導要領「天皇についての理解と敬愛の念を深める」
 - 第二の柱 「政府による教員政策」
 - 第三の柱 「政府による教育の条件整備」
- 三、「一人の人間もきりすてない学校」の継続
- 四、自民党の「教育構造改革」一九八五～二〇〇九年
- 五、「一人の人間もきりすてない学校」の新しい担い手
- 六、民主党の教育政策 一九九六～二〇一二年
- 七、維新の会の教育政策二〇一〇～一二年

『私の学校教育体験の区分』

- ① 1949～57年 小中学生時代 山村の集散地・多摩川の源流に近い氷川町
- ② 1958～64年 高大学生時代 立川、文京区で・いかに生きるべきか、苦悩
- ③ 1965～76年 定時制教員 分校、職業課程、社会科・日本と西欧各地旅行
- ④ 1977～2005年 全日制普通課程の新設校、伝統校。嘱託。世界史教員

① 1949～57年 小中学生時代

私は、1942年生まれ。アジア・太平洋戦争が始まって、一年後にこの世に生を受けた。東京の西の端で、小中高校時代を過ごした。首都の飲料水確保のための小河口ダムは、戦中の中断をへて、私が中3の時に完成した。今は、過疎の町で山歩きに訪れる寂しい町だが、私の子ども時代は、1学年4クラス200人位いた。山々に囲まれていたので分校も5つあった。親たちは、木を育て、炭を焼いて暮らす人、木材工場で働く人、都の水道局の職員、商人、職人と賑やかであった。戦争で父親を失った子もいた。無事帰って来られても、社会全体が貧しさをかかえながら、何かほっとして、子どもに期待をかけている状況だった。小1～3年の担任の先生は、川に遊びに連れて行ったり、宿直のときには近所の子どもを集めて話を聞かせたり、休日には多摩川遊園地に連れて行ったりした。班編成をして向かい合って勉強した記憶もある。6年生の時に、

ビキニ事件があり、校庭で、「原爆許すまじ」を友達と歌ったことを、最近思い出した。

中学は、教科担任制となり、先生方の個性も見えてきた。最近、生徒会誌「山びこ」をみて、クラブ活動や生徒会活動の報告、文芸作品を読み、活発で、質が高かったことを発見した。「山びこ6号」を見ると、報道部長、新旧生徒会長のあとに、校長も「世論の勝利」という題で文を寄せている。スエズ紛争、ハンガリー動乱にふれ、日本は軍備を放棄して10年、国連加盟が認められた年であると述べ、「～国際政治に対する正しい判断と鋭い感覚を持つ必要がある。そのためには言うまでもなくよく読むことであり、聴くことであり、話し合うことである。そして常に新しい息吹を持つことである。しかも若い中学生諸君の持つ新しい息吹はやがて正しい世論の一粒となって偉大な世論に育っていく。そして、世論の勝利を形づくっていくのである」と結んでいる。戦後の新制中学の意気込みが伝わってくる。

大森報告：自民党の教育政策の第二の柱が「政府による教員政策」である。その目的は、教育労働運動の力を弱めることだった。～日教組系の政治団体は、52年の総選挙で再軍備反対を基準に59人を推薦し38人を当選させていた。教育労働運動の力を弱めることは、「政府による内容統制」（能力主義と国家主義）をすすめるためにも必要とされた。56年「地教行法」（教育委員会は公選制から任命制へ）を起点にして、政府→県教委→地教委→校長→教員→子どもへといたる「政府による内容統制」のルートの開通を目指していた政府・自民党の前には、各学校で組合員として団結する教員集団の存在が障壁となっていたからである。政府・自民党は、労働政策の観点からも、内容統制の観点からも、「政府による教員政策」を強めた。

② 1958～64年 高校・大学時代

高校に入学して、初めてもらった生徒会誌「玲瓏 3号」もまた、最近見直した。格調の高い文が並んでいる。校長の「神について」、生徒会長の「規律と愛」、「郷土三多摩」「村山療養所訪問記」、文芸作品、座談会「立高生を分析する」・・・生徒部長で社会科の先生は、男女共学が始まったばかりの頃のトイレのこと、立川基地に近く、地域で風紀問題に取り組んだこと、奥さんの調停委員としての仕事のことなど、身近な問題を語りかけてくれた。理科、社会の教科は、実験・観察・レポート・発表が多かった。英語も文学作品やニュースを取り上げた教材で学んだ。高3の1960年は講和条約から10年、新安保条約をめぐって高まった世論・国会の動きに注目、クラス討論の上、全校集会が開かれたこともあった。文化祭、体育祭、合唱コンクールも活発で、クラス・部単位の参加があり、クラスコンパ、文集作りと、お互いを知り協力することが大切にされた。たまたま入った社会科学部最大のイベントは夏休み一週間の農村調査の合宿だった。場所選びや、進行は顧問の先生が中心だが、会計・宿舎の交渉・食事の準備などは生徒が担当した。先生が亡くなって遺品の中から「回覧ノート」が出てきたと娘さんが届けてくれた。これからの世の中はどうか、資本主義と社会主義とは、進路と家の事情、・・・青春の悩みが書き連ねてある。当時は多摩地区が一つの学区で、隣の県から寄留してきた人もいた。私は、青梅線の始発駅から終点まで1時間20分乗る通学であった。乗り降りする人、車窓の風景。多摩全域から集まった個性豊かな友人との出会いは、小中大学生時代の中でも一番の宝に思える。

勤評闘争を描いた、石川達三の「人間の壁」を新聞小説で読み、映画も見た記憶がある。

大森報告：その一つ目の画期が58年だった。同年、政府・自民党は、教員に対する勤務評定（勤評）の制度を全国に導入したが、そのねらいは、勤評によって教員を分断し、教育労働運動の団結の基礎である仲間意識を破壊することにあった。ところが、このとき東京の教員たちは、こう

した勤評のねらいをほぼ正確に見抜いて、団結を破壊する勤評に、労働者の最高の団結の形態であるストライキを対置した(4月23日)。ここに日本の公務員史における最初の本格的なストライキが始まり全国化する。教育労働運動はむしろ強化された。

大学は、都心にある男女共学の文学部史学科東洋史専攻に進んだ。日本を包むもう一回り大きい世界、アジア・中国への関心からだった。上原専祿の「世界史」教科書にも影響を受けていたと思う。60年安保の翌年の入学であり、政治についての教室討論、デモに参加することもあったが、全員でというより関心の高い人が参加するという感じであった。最初の印象は、古くさい漢籍の世界の臭いがしてもう一つ馴染めないところがあった。一年生の部活は、社会科学の古典を学ぶために社研に、2・3年生では、セツルメントに入り子供会活動をしたりした。女性史への関心から、誘われて、婦人民主クラブの勉強会にも参加した。4年が近づくと、卒論に取り組むことになり、中国近代史のある人物を取り上げたが、不十分なままの提出だった。大学時代は、自由な猶予期間であった。読みたい本を読み、思いを巡らすことができた。しかし、自由に選べることは、自分が選んで進まなければならないことであり、自分の立場をめぐって、考えがまとまらず、一時ノイローゼ気味の自分を体験したが、友人との会話に救われた。卒業間際、中教審が「期待される人間像」を出したことが伝えられた。何か、枠をはめられるような気がした。

③ 1965～76年 定時制普通科 商業科 社会科教員

都立多摩高等学校定時制課程・奥多摩分校

他校の大学院に進学して、もう少し勉強したい気持ちがあったが、自立するためには、仕事を持つことと思い、就職した。地域の要望を受けて、出身中学を仮校舎にして開校4年目の学校。100人未満の生徒達。私の同級生は卒業、私の同級生の妹さんが在学していた。教員は、教頭以外は皆20代、生徒は、地域の精密機械工業・石灰加工業の工員、商店の店員、事務員、有線放送のアナウンサー、准看護婦、お手伝いさん、バスの運転手・・・と様々であった。通学、労働の厳しさもあったが、地域の期待を受け、大事にされていた。基本的に、生徒も、教職員も和気あいあいの雰囲気であった。全日制もある、独立校舎の学校をめざす運動もしたが、全日制に通わせたい親は、町の外の空気を吸わせたいという声が強く、実を結ぶことはなかった。教員の労働条件は、週一日の研修日、定時制手当があり、途中から、僻地勤務ということで、2年に1度3ヶ月早く昇進するようになった。教科一人という大変さもあったが、恵まれていた。しかし、都心から遠いことは、夜間の通勤時間、研修の困難さがあった。生まれ育った地で教員になったことは、今思うと、幸せなことであった。20代の8年間勤務した学校は、過疎化が進む中、私の退職の年に閉校した。

都立第五商業高等学校定時制課程(国立市) 1973～1976 1学年2クラス

集団就職で、遠くから親元を離れて寮生活をしている生徒もかなりいた。身体が弱いために全日制に行けず、入学してくる生徒、両親を亡くした兄弟、家庭を持ち子育てをしている母親、ベトナムから来て働いている生徒もいた。教員は、寺の住職、税理士、商店主と、他の仕事を持っている人もいて、それぞれ主張のはっきりした方々だったが、組合活動・職場会を大切にしていた。定時制で、十分な時間がなかったが、生徒会役員の合宿をする、文化祭は全定合同であるなど、生徒の自主性を重視した。学徒動員でなくなった卒業生の慰霊の活動も学校行事として行っていた。

この頃の定時制勤務は、時間の管理も緩やかであったので、個人として、多くの見聞を拡げることができた。大変ではあったが、出身校の時間講師の体験、音楽会、観劇、内外の旅行、カル

チャーセンターで講義を受ける等、学校の夏休みを利用するだけでなく、研修日、平日の午前中も活用することができたことは、有り難いことだった。

大森報告：政府・自民党は巻き返しにかかる。その画期が71年の「教職員の給与等に関する特別措置法」だった。4%の調整額支給という「給与改善」と引き換えに「労働基準法」の超勤手当条項について教員を適用除外した。そのねらいは、一目瞭然たる低賃金という教員管理政策上の弱みに一定の改善を行い、併せて、教員から超勤手当を要求する権利を奪い取り、そのことを通じて、教員を一般の労働者から切り離し、その労働者性を失わせていくことにあった。(内田宜人『戦後教育労働運動史論』) 74年には、「教員人材確保法」による9%の賃金引き上げもあった。これらの政策は、ボディブローのように教育労働運動に打撃を与え、他の要因も重なり、74年春闘以降、世論に影響を与えるような本格的なストライキは次第に行われなくなる。

④ 1977～2005年 全日制普通科 世界史教員

都立八王子東高等学校 1976年開校2年目から12年勤務した。この頃、新設の都立高校が相次いで設立された。開設期の忙しさの中でも、研修日を確保、校則も開設要員や1年目の教職員だけでなく新しく加わる教職員の意見を取り入れて作っていった。新設校は、教職員の採用も含めて校長に権限があり学校運営に反映された。一代目の校長の構想は、「高校らしい高校をつくる」であり、教員の出身校や、経歴に頼らない方針だった。「高校らしい高校」という方針の背景には、旧制中学から続く伝統校は、生徒が変化しているにもかかわらず、教科についても生活面でも放任で生徒を伸ばしていない、という認識があった。今の高校生に合った具体的な、手を入れた指導が必要という考えだった。カリキュラムの上では、基礎講座と特別講座が設けられた。基礎講座は、英国数のいずれか、苦手とするものを選び、3段階の習熟度別にして、基礎を固めようとするもので、低いクラスをベテランの先生が指導にあたった。特別講座は、教員の関心のあるテーマをあげ、生徒が応募するものである。基礎講座は週2時間、特別講座は週1時間が充てられた。特別講座は、「小麦の科学」(家庭科)、「平家物語を読む」(国語科)、「二つの朝鮮・二つのドイツ」(世界史)、「油絵」(美術科)、「色彩の科学」(化学科)・・・校長も参加した。生徒と共に探求する姿勢であった。「学年便り」を出し、教員の側の期待を生徒に積極的に伝え、保護者は、学校全体の動きを伝える「便り」を編集、広報の役割を果たすようになった。多摩地区の学区が分割され、八王子・日野地区の生徒が旧制中学の伝統がある高校に進学できなくなる状況のなか、地元の中からの強い要望があったと聞いた。八王子というまとまりのある地域性もあり、教員間のコミュニケーションも比較的良かった。運動・生徒会に加え演劇・コーラスなど文化芸術表現活動も盛り上がった。八王子東養護学校とは、互いの文化祭を訪問、演奏するなどの交流もするようになった。

都立戸山高等学校 1989～2000年

百周年記念事業を終えた翌年より勤務した。戦前はオーバーにポケットを作らせない等、鍛錬型、軍国主義教育の男子校。戦後はその反省から、「自主・自由」、徹底的に考えさせる、自治能力を高める教育をめざし、都立高校の中でも高い評価を受けていた。「学生公論」という生徒会誌があり、新聞部は活版の「戸山高新聞」を年4回発行していた。ただ、進学実績をあげる(八王子東高は、それで社会に評価されるようになった)ことより、長い目で見て社会的、人間的に有為なリーダーを育てることに眼目がおかれ、カリキュラムは、全天候型といわれ、文系進学希望者も数Ⅲまで履修、理系進学希望者も日本史を学習するものであった。入りやすい大学に入るといふより、本当に学びたいものを見つけ、努力する・応援するという進路指導であった。文化祭

は、1年は展示（社会性のあるもの）、2年は演劇（シェークスピア作品が多かった）3年は映画（自分達で、脚本を書き、撮影、編集）というパターンで取り組み、かなり見応えがあった。そのための労力はかなりのものだったが得るものも多かった。職員会議も、十分時間をかけ、結論に至る過程を重視した運営だった。又、生活指導など、時々課題を特化し、分科会を作って、全ての人が発言、議論を尽くすような工夫があった。卒業式は、各クラスより卒業式委員を選び、スピーチの内容や曲選び等も係教師と相談しながら進めた。いわゆる答辞ではなく、数人が、先輩に伝えたいことを語る、というものであった。私にとって、最後の卒業担任となった1999年度の卒業式に向けて、都教育庁から、壇上に日の丸掲揚、君が代斉唱の通達があった。何度も話し合い、アンケートもとった上、歌うことは強制でないことを伝え、メロディのみ流すことにした。その後、各学校の特徴ある祝いの卒業式は、教育庁が監視、不起立者を処分する卒業式に変質していった。国家が統制する教育へ転換する始まりだった。

都立日野台高等学校 2001～2004年 嘱託

八王子東の数年後に開設。八王子東の指導が細かすぎるとの批判もあり、より伸びやかな都立高校らしい高校をめざしたようだ。沖縄修学旅行は、事前学習、テーマごとの班行動、終わってからのレポート作成まで充実していた。現地の人との交流会・映画鑑賞・図書の整備、文化祭での発表と、ふくらみがあるものだった。

教務部の奨学金係となり、その事務を扱い、生徒の窓口になり、生徒の家計状況を知ることになった。利子付き奨学金がほとんどであった。若い意欲のある学生への支援を拡充する必要を強く感じた。

終わりに

「グローバル競争」「対立する国際社会」「地球大の危険：持続可能か？」こんな言葉が行き交っている。人類は20世紀の前半に、世界大戦を二度まで体験した。これに懲りて、平和がやってくるだろうと期待したが、その後、冷戦・内戦・民族解放戦争、反テロ戦争・・・と続き、2014年の今、核は拡散、原子力発電所が世界商品となって、安部首相はトップセールスに飛び回っている。こんな時代を生き抜く子ども達に必要な教育とは、どんな教育だろう、必要な条件とは何か。大森報告に学び、自分の体験に照らして考えたことを記したい。

ベトナム戦争、中国の文化大革命、冷戦終結を経て、国際経済競争が激しくなった。1975年のG6（主要6ヶ国）から、2008年にはG20（主要20ヶ国）が世界経済政策を調整するようになった。日本では、この競争を優位に進めるため「構造改革」が課題になったとし、85年頃より、戦後の憲法原理を解体し、全てを自由競争にさらし、臨時雇用を増やし、国民の間に格差を拡大する一方、国家主義・ナショナリズムを煽り、対抗的軍事力を増強することで、企業の利益を確保することが、自民党の国家戦略となる。

さらに、経済と軍事力を一体化し国家意識を強め、武器輸出・海外派兵も認めようとし、国民の間には排外主義が広がろうとしている。その後に登場した民主党・維新の会の政策も大同小異といってよいだろう。

一方、「教育構造改革」が進行する中、現在、余裕なく競争させられている教育現場で鬱に苦しむ教員が増えている。子ども達も、競争と格差・差別意識にさらされ、イジメに苦しんでいる。こんな時だからこそ、教員が落ち着いて、チームを組んで育てる、教育を楽しみ、人間のつながりを大切にする職場が何よりも必要とされていると思う。

私が体験した戦後の教育行政の仕事は、教育条件（定員、設備や給与、研修の機会）を整え・確保し、教員が、児童・生徒に十分向きあい、教育に打ち込めるようにすることだった。教育内

容は基準は示しても、具体的には、教員が目の前の子ども達に何が必要かを考え、チームを組んで取り組んだ。その自由と手応えが現場にあり、活力となった。

行政が教員を信じ、教員が育てることの喜びを感じられるような条件を整備してほしい。そうした中でこそ、子ども達も自分自身を信じ、自分から見、聞き、行動し、相手への共感力も生まれる。変化の激しい、多様な世界に対応して豊かに生きられる人間はこのような中で確実に育つだろう。国際化時代に生きる教育には、英語力の強化の前に、教育界の信頼感が必要だと思う。

(付記その1)

このままでは、現実に進行している「教育構造改革」に対する私の違和感がもう一つ伝わらないのではと思い、退職前後の都立高校・戸山高校の動きを年表メモで記しておきたい。

1994年 学区制拡大、単独選抜制度

1996年 推薦制の導入

1998年1月2日 教育庁職員、全都立高校事務室から時間割持ち帰る。
講師時間の水増しの疑い（3年選択講座の実情無視、減らす）

1999年 研修日は、1日から半日に

学校運営規則により、職員会議は決定機関ではなくなる。（校長のリーダーシップを高め、学校の自主性、公開性を高める、と理由を付けて）

2000年 卒業式に向けて、前記、通達

2001年 （退職）

進学重点校に指定（戸山高）

2004年 スーパーサイエンスハイスクール指定（戸山高）

現、前教務部長、50歳、51歳で、相次いで病気で死去。

前教務部長 S 氏の入院先での言葉

「戸山がどんどん変わってきてしまっている。いくら、職員会議で訴えても、教育とは違う方向にいつてしまう。まだ、生徒が頑張っているけれど、生徒も少しずつ変わってきているので、どこまで持ちこたえるか」と同僚に語っていたという。

前述したようなカリキュラムで、自主・自由をめざした戸山の教育は、即効性はなく、手間暇をかけて人間的な信頼の中で実を結んでいく教育であった。こうした流儀は、「教育構造改革」のなかで、解体圧力がかかり、剥ぎ取られていった。教員の中心として教務部長の立場にあったものがどれだけの過重なストレスに耐えなければならなかったか、追悼の言葉は伝えている。校舎改築の最中でもあった。

(付記その2)

2月に台湾旅行に参加したときに親しくなった二人の方の、学校教育に対する意見は厳しかった。精神保健福祉士として活動している方は、「学校にいい思い出を持っている人はいない」と語り、もう一人の、今、名護に住んでいる方は、高校を中退、建築士として働く長男、アメリカの大学・大学院で学び音楽活動をする次男を育てたが、自分の意志を示すと変わり者に見られてしまう学校での体験、多くのアンケートの結果は、5割以上の方が、どちらでもないと答える日本人の姿勢を指摘したことに、肅然とさせられた。又、かなり前のことになるが、インド旅行で見た教室の風景も忘れられない。窓もない、照明もない、土でできた部屋で学ぶ生徒達の輝く表情。

Pa

私達は、3年前には、東日本大震災で自然の脅威と人間のしていることの危うさを体験した。ここから、何を学び取るべきなのか？ 教育への問いはより深く、広がっている。



日韓合同授業研究会学習会

「韓国がおもしろい ～ことばと文化から」

お話：山下 誠さん

(高校教師・昨年ハンゲルの日に韓国で国務総理表彰受賞)

阪堂千津子さん

(韓国語教師・NHK ラジオ講座「まいにちハンゲル」講師)

コーディネーター：善元幸夫 (日韓合同授業研究会代表)

隣の国韓国。世の中で反日・嫌韓と言われても、やっぱり韓国が好き！K-POPが好き。韓流ドラマが好き。おいしいものが好き。そんな若い人たちと付き合ってきたお二人から、日本と韓国の言葉や文化について語ってまいります。

日時：2014年5月17日(土) 15:00～17:00

会場：アジア文化会館(ABK) 101号室 tel03-3946-4121

都営三田線千石駅A1徒歩3分 JR 巢鴨南口徒歩10分

会費無料 申込み不要

短信

○大阪朝鮮高校ラグビー部を描いた映画「60万回目のトライ」渋谷で上映3月28日まで。その後名古屋・広島・札幌と上映が続きます。
○浦和レッズサポーターの横断幕に見られるような、排他的な発言をする若者が増えています。私たちの会の役割が求められています。
○5月の学習会に是非若い人たちをおさそいください。(F)

ウリ91号 2014年3月27日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南3-9-11

マールコート麹町303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先 larrabee1991@yahoo.co.jp

会費納入先

郵便振替 00170-1-428530